

龍源寺の歴史について(四)

松原 泰道

龍源寺は、もと龍翔院と称したことはたびたび記しましたが、その開山さまについて、寺の記録は次のように伝えます。

肥前の鍋島舎人の第二子、深江平兵衛夫婦は深く禅に帰依して、多くの高僧の教えを恆に聞いていました。夫婦の間に子がなかったので国の観音さまに祈願をこめて、もし男子が生れたら禅僧といたしますと誓いをたてて毎日、観音経をよみつづけました。そして授かったのが開山さまで、僧名を禅格(ぜんかく)、号を越溪(えっけい)と申されます。

十二才の時、父につれられ江戸駒込の勝林寺の了堂和尚に会ったのが第二の仏縁です。

十五才の春には、父の命で下僕を連れて伊勢参宮をしますが、そ

の帰りに松坂の近くで自分の手で髪をおろしました。供の二人もまた頭をまるめ、路を転じて共に近江の永源寺の如雪禅師の弟子になりました。十七才、再び江戸の勝林寺に帰り、更に曹溪寺に止り、後に京都へ上つて儒教を二ヶ年の間学んでおられます。再び江戸へ出て高輪東禅寺の虎伯(こはく)禅師に参禅しました。

その後も各地の高僧を訪ねては参禅をつづけましたが、最後に江戸渋谷の吸江寺開山、石潭(せきたん)禅師の門に入り、その道奥を究めました。時に二十三才でありました。

そして、前にも記しましたように、米沢の城主上杉定勝の女、松嶺隱尼の開基した龍翔院の開山となられるのです。

開山禅師は、三十二才で遷化(せんげい)死去のこと)されました。延宝四年(一六七六年)十一月二十日でありました。その法は

伽山(かさん)和尚に伝えられております。

この伽山和尚もまた名僧で、奥平出羽守貞久の系譜に生れ、奥平昌能、章昌両公の帰依が深かったようです。寺でも同和尚を中興開山としてたたえております。

和尚はまた松巖寺の開山に招かれました。このお寺は、後に奥平公の封地となった今日の大分県、昔の豊前中津に改建されました

和尚は龍翔・松巖の両寺、つまり江戸と豊前の二ヶ寺に禅風を高くかかげ、奥平候をはじめ多くの人々に慕われましたが、享保元年(一七一六年)十月八日に中津松巖寺でおなくなりになりました。

昨年は和尚の二百五十年忌でありましたので、松巖寺では盛大に法要がつとめられました。龍源寺でも昨年十二月一日に、うちわでおつとめ致しました。正式には、目下計劃中の本堂改建ができました時に奉修する予定であります。